

『いちごのうた』および「いちごのうたプロジェクト」

ホワイトペーパー

版 v1.2

設計・制度・現時点を整理した外部向け説明文書



©2025 いちごのうた / のおぼろ / いちごのうたスタジオ

発行:いちごのうたスタジオ

2026年5月30日

目次

目次	1
要旨	2
1. 本書の役割	3
2. 『いちごのうた』とは何か	4
3. 「いちごのうたプロジェクト」とは何か	6
4. この活動を支える制度設計	8
5. 現時点で何が起きているか	10
6. 現時点で何をどう評価できるか	13
7. 経済との接点と波及可能性	14
8. 今後の確認と整理	16
9. 総括	17
奥付	18

要旨

[事実] 『いちごのうた』は、特定の企業・地域・立場に閉じた歌ではなく、誰でも使える「みんなのうた」として設計された楽曲である。

[事実] 「いちごのうたプロジェクト」は、『いちごのうた』を入口に、人と人、人と農の関わりが暮らしの中で生まれ、続いていくことを重視する活動であり、歌そのものの拡散を最終目的とはしていない。

[事実] そのため本活動は、特定の場で大きく押し広げることよりも、学校、図書館、農・流通・小売、地域イベント、配布物、第三者による活用など、それぞれの場で使われ、続いていく形を重視している。

[事実] 現時点では、高根沢町内を中心に、教育、公共文化、農・流通・小売、地域イベント、配布物、第三者による活用など、複数の場で活動が確認されている。町外や県内の一部でも接点は確認されている。

[推論] また、本活動は農家の発案を起点としながら、農園 PR に閉じず、誰でも使える文化資源として設計を切り替えた点に独自性がある。

[推論] さらに、『いちごのうた』は、場所、人、商品、事業、イベントとの関係性を生むことで、来訪、参加、購入、二次創作、地域企画などの経済的な接点につながり得る。

[推論] 以上から、現時点では、『いちごのうた』を入口とした関わりが、高根沢町を中心に、暮らしの複数の場に現れ始めている段階にあると考えられる。

[構想] 全国への展開は今後の構想として位置づけられている。

1. 本書の役割

[事実] 本書は、『いちごのうた』と「いちごのうたプロジェクト」の全体像を、外部の関係者に向けて示すホワイトペーパーである。

[事実] 内容は、公開できる事実と、現時点で確認できている内容をもとに整理している。

[事実] したがって、本書は事実を網羅する記録資料ではなく、活動の位置づけ、独自性、制度設計、現時点で確認できる実態、評価できる範囲を切り分けて示す外部説明用の主文書である。

[事実] 本書は、行政、教育、図書館、流通・小売、地域団体、取材者、協力・連携を検討する関係者などが、本活動をどのように理解し、位置づけ、扱うべきかを判断するための材料として作成している。

[事実] 施設ごとの一覧、時系列の全記録、証拠資料、更新履歴、未確認事項については、別途整理・管理を進めている。

2. 『いちごのうた』とは何か

2-1. 農家発の構想と設計転換

[事実] 『いちごのうた』は、加藤康宏氏の発案と構想を起点に、中島伸雄氏(とちぎ未来大使、元高根沢町地域おこし協力隊、のぶおぼんどベースボーカル)、のぶおぼんど、檜原朝美氏(グラフィックデザイナー・イラストレーター)によって形になった楽曲である。

[事実] 発想の段階では、加藤いちご園の理念を入れ込み、加藤いちご園のPRにつながる歌として形にしようとしていた。

[事実] しかし、制作に入る前に、その方向では特定の企業や地域のための歌に閉じやすく、広がりにも限界があると考えた。

[事実] そこで、いちごを通じて、人と人、人と農の関わりに目を向ける歌へと方向を変えた。

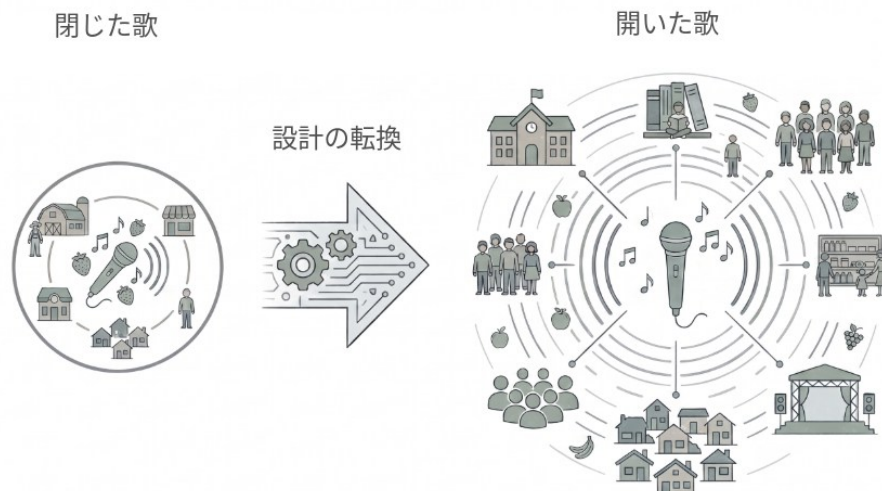
[事実] そのうえで、加藤いちご園の理念も素材の一つとしながら、誰でも使え、地域や立場を越えて活用できる普遍的な歌として設計した。

[推論] したがって、『いちごのうた』の特徴は、特定の企業・地域・立場に閉じる形ではなく、誰でも使える歌へと設計を切り替えた点にあると考えられる。

[推論] また、この活動が農家の発案を起点としている点も、本活動の性質を理解するうえで重要である。農家は、いちごを生産する立場であると同時に、消費者、地域、流通、暮らしの接点に日常的に関わる存在でもある。そのため、いちごを単なる商品としてではなく、人と人、人と農をつなぐ入口として捉えやすい立場にある。

[推論] 本活動の独自性は、農家発でありながら農園PRに閉じず、誰でも使える文化資源として設計を切り替えた点にある。行政主導の政策事業や企業主導の販促活動とは異なる性質を持ち、農業の現場に根ざした生活感と、特定の主体に閉じない公共性を両立しようとしていることが特徴である。

発想の転換



2-2. 歌の役割

【事実】この歌は、いちごを視点の中心に置き、日常の中でいちごに触れる複数の場面を自然に含んだ内容になっている。

【推論】したがって、『いちごのうた』は特定の行動や主張を前面に出す歌というより、いちごをめぐる暮らしの情景を通して受け手が関われる余地を残した歌だと考えられる。

【推論】この性質によって、この歌は特定の立場や場面に限定されにくく、学校、図書館、売り場、イベントなど、異なる場でも入口として使われやすい歌になっていると考えられる。

2-3. 「みんなのうた」としての設計

【事実】『いちごのうた』は、特定の企業・地域・立場の中だけに収めるのではなく、誰でも歌い、使えることを前提として設計されている。

【事実】利用規約では、個人・法人・団体・学校・自治体等を利用者と定義し、本素材について、非独占的・取消可能・譲渡不可の無償ライセンスを地域や目的を問わず認めている。また、非営利・営利のいずれの利用も可能としている。

【推論】この開かれた設計は、一般的な地域 PR ソングとの違いを支える重要な条件の一つである。利用できる主体や場面をあらかじめ限定していないため、歌が特定の立場や用途に閉じにくい形になっている。

3. 「いちごのうたプロジェクト」とは何か

3-1. 『いちごのうた』を入口に、関わりを育てる活動

[事実]「いちごのうたプロジェクト」の目的は、『いちごのうた』そのものの拡散を最終目的とすることではない。

[事実]まずは『いちごのうた』を入口に、人と人、人と農のつながりが暮らしの中に生まれ、続いていくことを重視している。

[事実] そのため、活動領域は音楽に限らず、教育、図書館、農・流通・小売、地域イベント、福祉、グッズ、二次創作、第三者による商品化など、暮らしの中のさまざまな場にまたがっている。

3-2. 「文化を耕す」という考え方

[推論] この考え方の核心は、文化を一度きりの話題づくりではなく、暮らしの中で繰り返し触れられ、関わりが続いていくものとして捉えている点にある。

[事実]本プロジェクトは、「文化を耕す」ことを目指している。

[事実] 会則では、理念を「人と人とのつながりを育む『文化の土壌』を社会に耕し、暮らしに根づかせていくこと」と定め、その起点として『いちごのうた』を位置づけている。

[推論] つまり、「文化を耕す」とは、異なる場でも使われ、次の使い方や広がりにつながっていく土台を少しずつ育てていくことだと言える。

3-3. それぞれの場で使われ、続いていく広がり

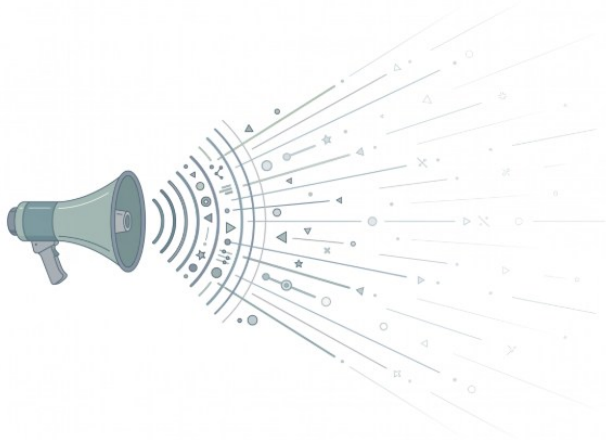
[事実] 本プロジェクトは、自分たちが主導して押し広げるのではなく、もともと人が集まっている場所や、他者が中心のイベントの中で使われる形を重ねてきた。

[事実] そのため、歌や世界観は、学校、図書館、直売所、イベント、福祉施設、第三者の創作活動など、暮らしの中のさまざまな場で、それぞれに合った形で使われている。

[構想] 長期的には、高根沢町内での定着を深めながら、町外から県内、さらに全国へと、同じ考え方で使われる場が少しずつ増えていくことを目指している。

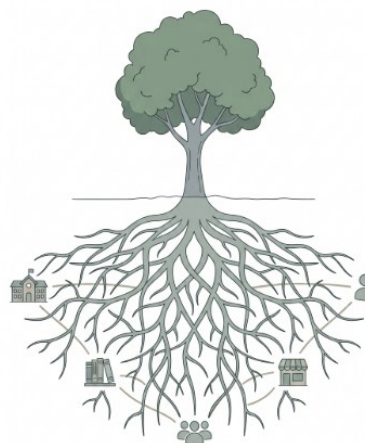
中央集権でなく自律分散で広がり支える

中心から発信し、流行る



中心の影響力和依存関係

各地で支え、根づく



地域のハブと支援関係

3-4. 理解されにくさと、その理由

[事実] 本活動では、特定の企業・地域・立場の中に閉じず、誰でも使える「みんなのうた」として設計し、利用ルールも公開している。広がり方についても、自分たちが大きく宣伝して展開することより、学校、図書館、直売所、イベントなど、それぞれの場で使われ続けることを重視している。

[推論] それにもかかわらず『いちごのうた』と「いちごのうたプロジェクト」が伝わりにくいのは、見える形が地域 PR やイベント広報と似ているためである。

[推論] 実際の違いは、誰でも使えるように開かれていることと、特定の主体が主導して広げるのではなく、それぞれの場で使われ続けることを重視している点にある。

4. この活動を支える制度設計

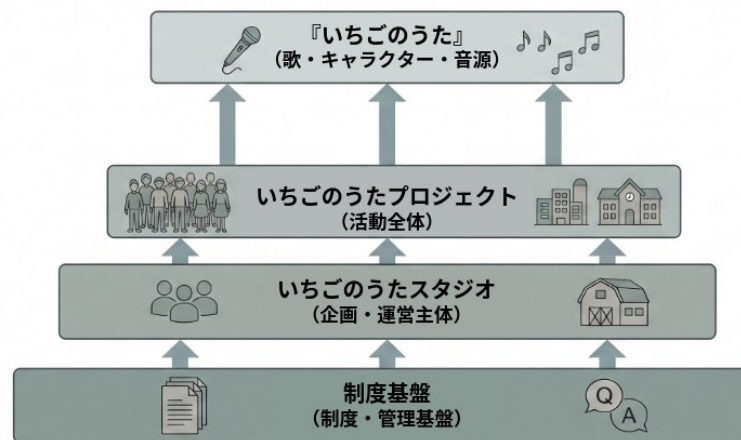
4-1. 運営主体

[事実]運営主体は、「いちごのうたスタジオ」という任意団体である。

[事実]スタジオは、『いちごのうた』を起点に、人と人、人と農のつながりが育つ土台を広げ、活動が続いていくための仕組みを整えることを目的とする団体である。

[事実]現時点では、『いちごのうた』を活動の中心に置き、その先にある理念の実現を重視している。

『いちごのうた』／いちごのうたプロジェクト／いちごのうたスタジオの関係



4-2. 非営利・中立の立場

[事実]会則では、本団体が営利を目的とせず、政治的・宗教的な中立性を保つことを定めている。

[推論]この立場は、学校、行政、企業、個人など、立場の異なる人や組織が、特定の利害に偏らず関わられるための前提の一つになっている。

4-3. 権利構造

[事実]イラスト、楽曲、演奏・音源に関する著作権や原盤権は、それぞれの原権利者が保有している。

[事実]そのうえで、加藤康宏氏が有する非独占的な使用权については、関係者の合意のもとで、いちごのうたスタジオが運用・管理を担っている。

[推論]この構造によって、創作者の権利を守りつつ、運用が特定の一人に独占されにくい形に保たれている。

4-4. 利用ルール

[事実]利用規約では、本素材について非独占的・取消可能・譲渡不可の無償ライセンスを定め、非営利・営利のいずれの利用も可能としている。

[事実]あわせて、素材そのものを主たる価値とする販売や再配布の禁止、クレジット表記、二次創作の条件、政治・宗教利用や誤認を招く利用の禁止など、利用の範囲と条件も明記している。

[推論]つまり、この活動は「何でも自由」ではない。誰でも使えるように開かれている一方で、創作者の権利を守り、誤解を招く利用を防ぐためのルールも、あらかじめ示している。

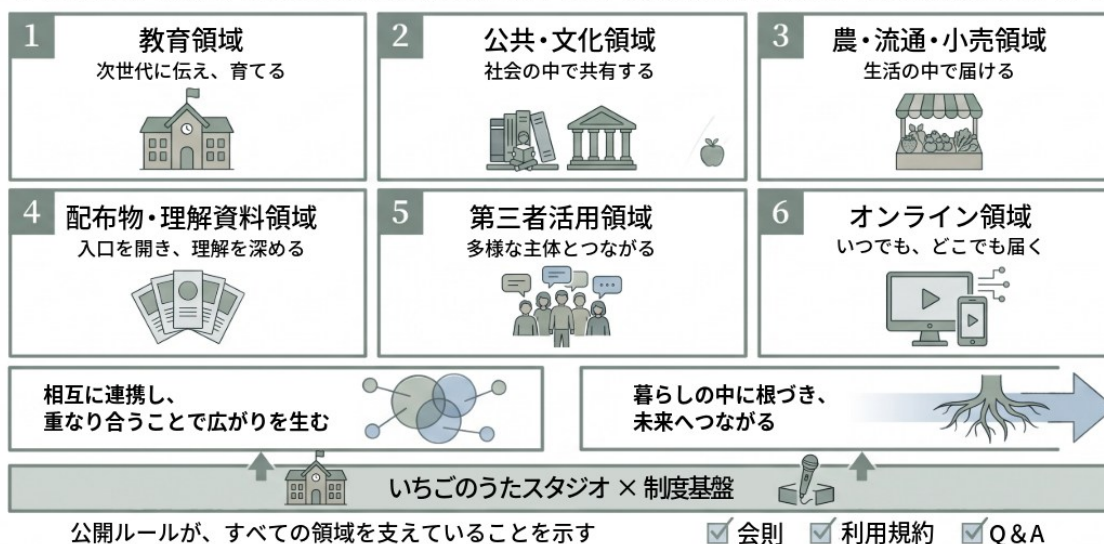
5. 現時点で何が起きているか

[事実]現時点で確認できている活動は、教育、公共文化、農・流通・小売、配布物、第三者による活用、オンラインなど、暮らしの複数の場にまたがっている。

[推論]これらの事実は、本活動が特定の一場面に限られず、暮らしの複数の領域に入り始めていることを示している。

活動領域の整理図

『いちごのうた』を入口に、暮らしのさまざまな場に接点を開き、それぞれの領域が連携しながら、広がりと継続を生み出していく。



5-1. 活動の中心となる地域：高根沢町内

[事実]現時点で、『いちごのうた』と「いちごのうたプロジェクト」の活動が最も多く確認されるのは高根沢町内である。

[事実]学校、図書館、JA 経営直売所、道の駅直売所、スーパー、地域イベントなどの場に加え、ノベルティ、グッズ、説明漫画、第三者による活用などの形でも活動が確認されている。

[推論]以上から、高根沢町内が本プロジェクトの活動の中心地域であり、継続的な接点が最も多く確認されている地域だとみてよい。

5-2. 教育の場

[事実]町内の学校では、給食時に『いちごのうた』が流れる機会がある。

[留保]学校ごとの頻度には幅があり、毎日のように流れる学校から、年に数回程度の学校まで差がある。詳細は今後さらに確認が必要である。

[事実] 歌には子どもたちのコーラスが収録されており、各所で子どもたちが描いたイラストは、ミュージックビデオにも採用されている。

[推論] これらの事実から、子どもたちは受け手であるだけでなく、歌うこと、聴くこと、描くことを通じて関わる場面も生まれていると考えられる。

5-3. 公共文化・地域・福祉の場

[事実] 高根沢町図書館では、発表記念企画、CD 貸出、PR コーナー、関連イベントなどが行われている。

[事実] 2025 年 7 月 1 日には、図書館 3 館で発表記念プレゼント企画が開始された。

[事実] 地域のマルシェなどでは、プロジェクトとして数回出店している。

[事実] のぶおぼんどは、町内だけでなく町外のイベントや栃木県のイベントでも、出演依頼を受けてライブを行っている。

[事実] 中島伸雄氏は、町内外の地域イベントや福祉施設のイベントでもミニライブを行っている。

[事実] 福祉施設との関わりでは、イベントでのブース出展に加え、おめんの製作について作業委託も行っている。

[留保] 図書館の貸出件数やイベント回数の詳細は、現時点では整理途中であり、今後さらに確認が必要である。

[推論] これらの事実は、図書館では貸出や企画として、地域イベントや福祉施設では出店、ライブ、ミニライブ、作業委託などの形で、この歌やプロジェクトとの接点が町内外に広がっていることを示している。

5-4. 農・流通・小売の場

[事実] JA イベントでの活用について了承が得られ、JA 経営の直売所や道の駅直売所ではノベルティが展開され、一部のスーパー売り場では BGM として楽曲が流されている。

[事実] こうした接点は一か所にとどまらず、高根沢町内の複数の販売の場に広がっている。

[留保] 店舗の正式名称や開始時期は、現時点では整理途中であり、今後さらに確認が必要である。

[推論] これらの事実から、本活動は、日常の買い物や食に関わる導線にも入り始めていると考えられる。

5-5. 配布物と理解資料

[事実] 現時点までの主要な配布物は、スタンド POP1,000 枚、すごろく 2,000 枚、ぬりえ 3 種各 1,000 枚、おめん 1,600 個、シール 1,800 枚で、合計 9,400 点にのぼる。

[事実] このうち手渡しで配布されたものは 6 割弱であり、おめん 1,600 個はすべて手渡しされ、持ち帰られている。

[事実] JA 経営直売所だけでも、すごろく 700 枚、ぬりえ 300 枚以上が配布されている。

[事実] すごろくは児童館に相談し、原案を得たうえで、檜原朝美氏が制作し、ノベルティ化した。

[事実] 展示用とは別に、配布用の説明漫画も 1,000 枚配布している。

[推論] これらの事実から、配布物は、歌を聴く場とは別に、手渡しや持ち帰りを通じて接点をつくる役割も果たしていると言える。

[推論] とくに、すごろく、ぬりえ、おめん、説明漫画などは、年齢や関心の違いに応じて関わる入口になっているとみてよい。

5-6. 第三者による活用と外部への広がり

[事実] 第三者によるグッズや関連商品の自発的な展開も始まっている。

[事実] また、高根沢町の楽器店「DeluxeCable」が「いちごのうたプロジェクト」に賛同し、「のぶおぼんど」のベースボーカルである中島伸雄氏のために、高根沢町産木材を用いた“いちごカラー”のエレキベース「いちごベース」を製作し、贈呈している。

[事実] 目白大学の学生による卒論の取材対象にもなっている。

[事実] 他者が主催するイベントでは、プロジェクトメンバーが不在でも、ノベルティの配布や楽曲・キャラクターの活用が行われた事例がある。

[事実] また、活動を自主的に撮影・発信したり、イベント運営を手伝ったりする協力者もいる。

[推論] これらの事実は、第三者がそれぞれの立場でこの活動に反応し、自分たちの場で使ったり支えたりする動きが出てきていることを示している。

[留保] ただし、第三者利用件数や波及エリアの厚みについては、なお確認を要する。

5-7. オンラインで開かれた入口

[事実] 『いちごのうた』はショートバージョンとフルバージョンの両方が YouTube で公開されており、フルバージョンはミュージックビデオとして視聴できる。

[事実] フルバージョンの発表と同時に CD の発売も開始され、楽曲に触れるための媒体がオンライン以外にも用意された。

[事実] ショートバージョンはストリーミング配信されており、SNS でも音源として利用できる。

[事実] Instagram では公開告知や継続的な発信が行われ、ホームページでは活動や資料にアクセスできる。

[推論] こうした公開や媒体の整備は、学校、図書館、直売所などの生活の場で生まれた接点を、場所や立場を超えてたどれる入口になっている。

5-8. 地域での共有と認知

[事実] 活動の趣旨は、教育、行政、農業分野の関係者にも説明している。

[事実] その後も、町や県、JA の関係者との対話や情報共有が行われているが、関係のあり方や頻度は個別に異なる。

[事実] 地元メディア(NHK・ラジオ・新聞)でも、歌や活動が取り上げられている。

[推論] これらの事実は、本活動の趣旨や存在が、教育・行政・農業・メディアといった複数の分野で接点として現れ始めていることを示している。

6. 現時点で何をどう評価できるか

6-1. 評価の軸

[事実]本プロジェクトでは、通常の音楽プロモーションと同じ指標だけでなく、暮らしの中で接点がどれだけ増え、続いているかを評価の軸に置いている。

[事実]本プロジェクトでは、一時的な再生回数や話題量よりも、日常のどこで、どれだけ繰り返し使われているかを重視している。

[事実]そのため、評価の軸は、学校、図書館、直売所、小売、イベントなど、どのような場所で接点が生まれているか、その広がりと続き方に置いている。

[推論] そのため、認知率や全国的な定着度のように、現時点で十分な確認ができていない事項を先に大きく評価することは、本書の立場に合わない。

6-2. 現時点で言えること

[事実]現時点では、活動が最も多く確認されるのは高根沢町内である。町外や県内の一部でも接点は確認されているが、全国は今後の展開先として位置づけられている。

[推論] そう評価できるのは、高根沢町内では学校、図書館、直売所、小売、イベントなど複数の場で接点を確認されている一方、町外や県内については、どこでどの程度続いているのか、まだ十分に確認できていないためである。

[推論] したがって、現時点で最も堅実な評価としては、高根沢町を中心に、学校・図書館・直売所などを通じた接点の積み重ねが、暮らしの複数の場に現れ始めている段階にあるとみてよい。

[注意] 本活動は、完成した仕組みとしてではなく、暮らしの中の複数の場で接点が現れ始めている段階のものとして捉えるのが適切である。

6-3. まだ言い切らないこと

[事実]町民認知率、町内の子どもたちの中でどの程度歌われているか、県内でどの程度定着しているか、全国にどこまで広がっているかについては、現時点では断定しない。

[事実]今後確認が必要な事項には、学校ごとの接触実績、図書館3館の貸出・展示・イベント回数、町外イベントの一覧、JA・道の駅・スーパーの正式名称と開始時期、第三者によるグッズや関連商品の件数などがある。

[推論] そのため、本書でまず示すべきなのは、定着の大きさではなく、何がどこで始まっているかである。確認できている事実を積み上げて、現在地を示すことが重要である。

7. 経済との接点と波及可能性

【推論】本章では、『いちごのうた』および「いちごのうたプロジェクト」が、文化資源としてどのように経済活動と接点を持ち得るかを整理する。本章で扱うのは、現時点で確認された経済効果ではなく、歌、キャラクター、世界観、利用ルール、活用方法が社会の中で使われることによって生まれ得る波及の構造である。

7-1. 文化資源としての使われ方

【推論】『いちごのうた』の経済的な意味は、歌やキャラクターそのものを販売することに限定されない。むしろ、歌、キャラクター、世界観を、さまざまな主体が自分たちの活動に意味や親しみを加えるための文化資源として活用できる点にある。

【事実】本活動では、利用規約において、一定の条件のもとで非営利・営利のいずれの利用も可能としている。また、二次創作や商品・イベント等への活用についても、定められた範囲で認めている。この開かれた利用設計により、事業者、教育・福祉施設、地域団体、個人の創作者などが、それぞれの場で『いちごのうた』を活用しやすくなっている。

【推論】経済との接点は、関連商品の販売だけでなく、売り場づくり、イベント参加、地域企画、二次創作、来訪、回遊など、複数の形で生まれ得る。重要なのは、『いちごのうた』が完成品として消費されるだけでなく、他者の活動や商品、場づくりを生み出す素材として機能し得る点である。

7-2. 利用方法のパッケージ化と共通基盤

【推論】本活動の経済的な接点を広げるうえでは、素材を公開するだけでなく、利用方法を分かりやすい形で示すことが重要である。歌、キャラクター、配布物、クレジット表記、利用規約、FAQ、活用例などが組み合わさることで、利用者は、自分たちの場でどのように活用できるかを具体的に想像しやすくなる。

【推論】この場合の「パッケージ化」とは、特定の商品や企画を固定して提供することではない。学校、図書館、店舗、直売所、福祉施設、地域団体、事業者、個人の創作者などが、それぞれの立場で応用できるように、素材、ルール、手順、活用例を組み合わせ示すことである。

【推論】こうした利用方法のパッケージ化は、利用者が一から企画を考えたり、権利確認や表記方法に迷ったりする負担を下げる。その結果、『いちごのうた』は単なる楽曲や素材集ではなく、企画、商品、売り場、イベント、ワークショップ、二次創作などを生み出すための共通基盤として機能し得る。

7-3. 関係性が生む行動理由と経済接点

【推論】『いちごのうた』の経済的な波及は、歌そのものの収益だけではなく、歌が場所、人、商品、店舗、イベント、施設、事業などと結びつくことで行動理由を生む点にある。歌と対象との関係性が認識されることで、買う、訪れる、参加する、使う、紹介する、作るといった行動が生まれ得る。

【推論】この関係性には、大きく分けて二つの形がある。一つは、商品、店舗、イベント、企画などと意図的に結びつける形であり、これは共同企画、商品化、店舗・イベントでの活用事例として現れる。もう一つは、

場所、出来事、人との関係が受け手に意味として認識され、訪問や体験の理由になる形であり、これは聖地巡礼やコンテンツツーリズムに近い現象として現れる。

【推論】 前者は提供側が設計する関係性であり、後者は受け手の関心と行動によって結果的に生まれる関係性である。ただし、いずれも『いちごのうた』と対象が結びつくことで行動理由を生み、経済的な接点につながり得る点では共通している。

【推論】 したがって、経済との接点は、関連商品の販売だけでなく、売り場づくり、イベント参加、地域企画、二次創作、来訪、回遊など、複数の形で生まれ得る。歌との直接的な接点だけを見ると、農産物、音楽、イベント、直売所などに限られて見えやすい。しかし、歌が場所、人、商品、事業と結びつくことで、飲食、菓子、物販、農産物、交通、体験、イベント、印刷、宿泊など、複数の領域に関わりが生まれ得る。

7-4. 場所の意味化と経済化の原則

【推論】 場所に関する関係性は、プロジェクトが一方向的に「聖地」として設定して成立するものではない。歌への関心を通じて、場所や出来事、人の関わりに意味が見出されることで、訪れる、体験する、記録するといった行動理由が生まれる。

【推論】 『いちごのうた』については、高根沢町が生まれ、育ち始めた場所としての意味を持つ。この意味は、現時点で大きな経済効果が確認されているということではなく、文化的な関心が来訪や体験につながり得る条件があるということである。

【注意】 本活動における経済との接点は、歌や世界観を特定の主体が囲い込み、独占的に収益化することを意味しない。経済との接点は、文化を使い潰すためではなく、文化が続くための受け皿として扱う必要がある。公共性と利用しやすさを保ちながら、各主体が自分たちの場で活用できる余地を残すことが、本活動における経済化の基本原則である。

8. 今後の確認と整理

8-1. 確認できている事実を、外部からも確かめやすくする

[構想] 今後は、新しい説明を増やすよりも、確認できている事実を整理し、外部からも確かめやすい形にしていくことを重視する。

[事実] 特に、学校ごとの実績、図書館利用の実績、町外イベントの一覧、第三者利用の件数、協賛件数などについては、確認と整理を進める必要がある。

[構想] また、経済との接点を確認するためには、使用報告、第三者による商品化や共同企画、店舗・イベントでの活用、二次創作、町外・他地域での活用事例、継続利用の有無、来訪や回遊につながる接点などについても、今後整理していく必要がある。

[推論] 今後は、活動がどこで、どのように続いているのかを、外部の関係者にも確認しやすい形で示していく必要がある。

8-2. まずは高根沢町内での定着を深める

[構想] 次の段階では、まず高根沢町内の教育、図書館、福祉、直売所、小売、イベントなどの場で、一時的な接点ではなく、くり返し使われる形がどこまで育つかを見ていくことが重要である。

[推論] 町外への広がりを評価する前に、まず町内での定着を確かめていくことは、他の地域でも活かしやすい形を見定めるうえで土台になる。

[構想] そのうえで、栃木県内の教育・図書館・直売所など、活用されやすい場へ少しずつ広がっていくことを次の段階と考えている。

8-3. 100年構想は将来像として示す

[構想] 本プロジェクトは100年構想を掲げており、20年の地域的普及と80年の世代的普及を重ねた長期計画として考えている。

[推論] ただし、これは現時点の成果を大きく見せるための表現ではなく、この活動の進行方向を示す将来像として置いている。

[事実] 本書では、100年構想を、今どこまで進んでいるのかという現在地の評価とは切り分けて示している。

9. 総括

[事実] 『いちごのうた』は、特定の企業・地域・立場に閉じた歌ではなく、誰でも使える「みんなのうた」として設計された楽曲である。

[事実] 「いちごのうたプロジェクト」は、『いちごのうた』を入口に、人と人、人と農のつながりが暮らしの中に生まれ、続いていくことを重視する活動である。

[事実] 現時点では、高根沢町内を中心に、学校、図書館、直売所、小売、イベント、配布物、第三者による活用など、複数の場で接点が確認されている。

[推論] 以上から、本活動は、高根沢町を中心に、暮らしの複数の場に接点が現れ始めている段階にあると考えられる。現時点で評価すべきなのは、規模の大きさよりも、どのような場に入り込み、接点が生まれているかという点である。

[推論] また、本活動は、歌やキャラクターを単体で消費するだけでなく、場所、人、商品、事業、イベントとの関係性を生む文化資源としても機能し得る。その関係性が、来訪、参加、購入、二次創作、地域企画などの行動理由となることで、経済との接点が生まれる可能性がある。

[構想] 100年構想は、その現在地の先に置かれた将来像として理解するのが適切である。

奥付

文書名： 『いちごのうた』および「いちごのうたプロジェクト」ホワイトペーパー
文書種別： 外部説明用ホワイトペーパー
対象時点： 2026年3月21日現在
版： v1.2
発行日： 2026年5月30日
発行： いちごのうたスタジオ
所在地： 栃木県塩谷郡高根沢町宝積寺 2416(NPO 法人まちづくりちよっ蔵高根沢 施設内)

お問い合わせ

事務局：特定非営利活動法人 まちづくりちよっ蔵高根沢(担当：中島)

TEL:028-675-0004

ホームページ ichigonouta-project.jp



Instagram [@ichigonouta.project](https://www.instagram.com/ichigonouta.project)



YouTube 「のぶおぼんど いちごのうた」で検索



参考文献

- ・いちごのうた プロジェクト説明書【一般向け】
- ・いちごのうたスタジオ会則
- ・いちごのうた素材 利用規約
- ・いちごのうた素材 よくある質問 Q&A

クレジット

楽曲：作詞作曲 のぶお / 演奏 のぶおぼんど

デザイン・キャラクター：ひばらさん

企画・運営：いちごのうたスタジオ

※ 本書は、公開できる事実と対象時点で確認できている内容をもとに整理した公開版です。v1.2 では、対象時点は v1.1 から変更せず、農家発の独自性および経済との接点・波及可能性に関する整理を追加しました。

いちごを作る人、届ける人、食べる人、みんなの歌です。
歌うことで、みんなに届き つながります。
きみの声も、そのひとつ

いちごのうたプロジェクト